

蝶の骨

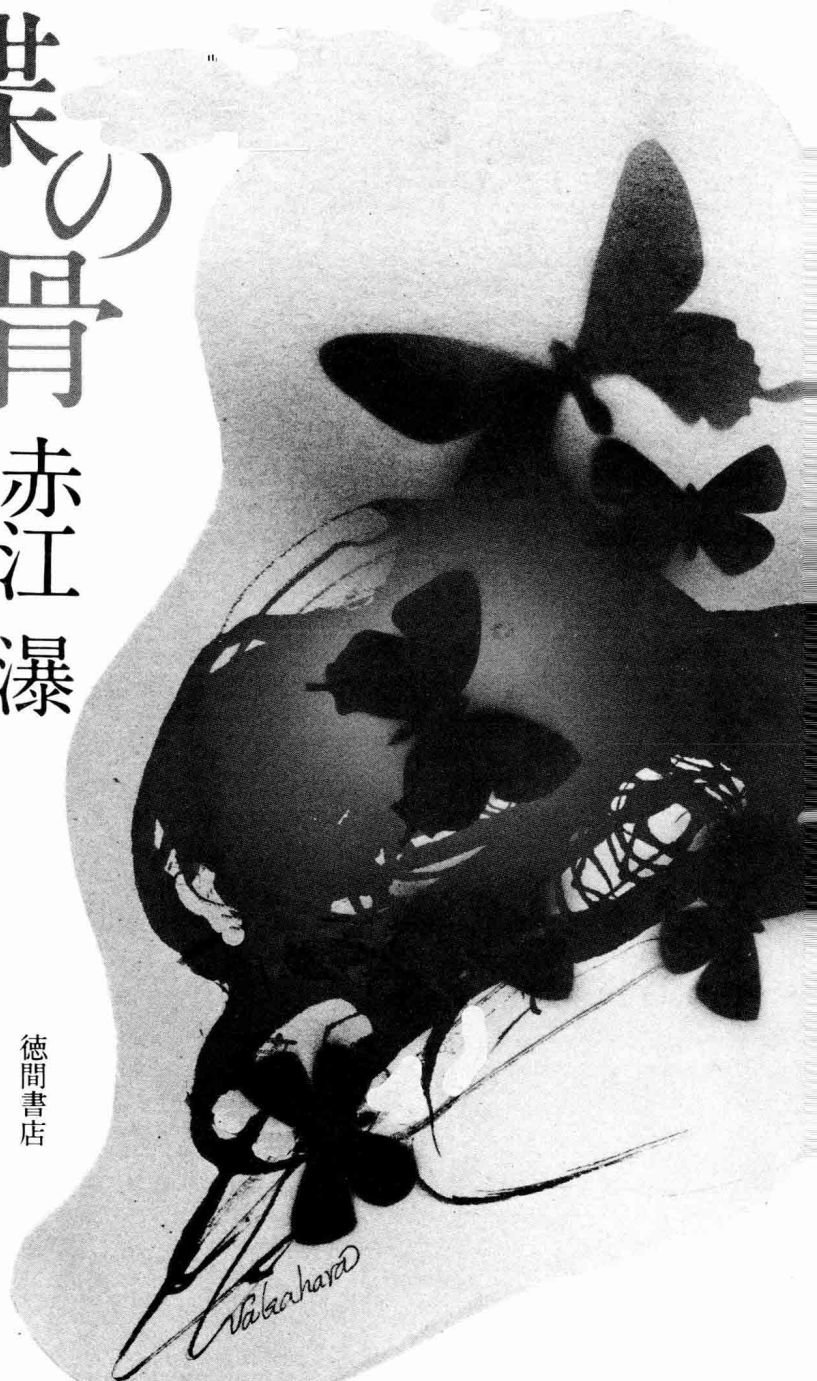
赤江
瀑



蝶の骨 赤江瀑

徳間書店

Wakabayashi



蝶の骨

昭和五十二年二月十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 赤江 瀑

発行者 徳間 康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇

電話東京(433)六二三一(代表)
振替東京四一四四三九二番

(乱丁・落丁本は本社またはお買求め
の書店にてお取り替えます)

蝶の骨／もくじ

〈第一部〉 濁り絵 蜜絵 漂い絵…………… 3

〈第二部〉 蝶の骨…………… 101

装幀・扉絵
中原脩

第一部

濁^{にご}
り
絵^え
蜜^{みつ}
絵^え
漂^{さまよ}
い
絵^え

一章

犯罪者は犯行現場にかえってくる、という言い習わしが世のなかにはある。

十五年ぶりで涼介と再会した折の流子の場合に、それはあてはまる言葉だった。

もっとも、流子自身、そうした言葉をそのとき頭に思いうかべたわけではないし、また、そんな自覚など決して持つような女でもなかったけれど。

真夏のちょうど正午どき。

ふだんの年なら、八月もなかばにさしかからんとするこの時期は、盆の帰省客などがあらかた出払って、東京はわずかの間、どことなくがらんとした閑期の様相を呈するのにな、いっこうにそんな気配もなく、街なかには相変らず人と車の群れでごった返していた。この陽ざかりに、なんにも好んで出歩かなくともと思わせるような人の動きと交通量が、しかしちょっと東京を離れていた流子には、妙に新鮮で、刺激的だった。

病院の予約時間までには、まだ三時間近く間があつたので、流子は新宿通りをぶらついてから地下に降り、西口へ出て、Kデパートに入った。

時間つぶしのぶらぶら歩きだったから、べつに目的はない。Tシャツにコットンのスラックス、つば広の白い帽子をラフにかぶって、手には赤いスーツ・ケースを一つさげているだけの、気軽

ないでたちで、彼女は冷房の風を頬にうけ、生きかえったような気分になった。

女一人、目的もなく踏み込んだ店内で、こんな場合、足のおもむく場所はないていきまわっている。婦人コーナー、装飾品売場などを彼女もまわって、ちょっとした人だかりのする一角で、足をとめた。

化粧品メーカーS堂が出している「チャーム・ビューティ・コーナー」の催し場らしく、ユニホームを着た女の美容師が、三、四人、モデルの頭をいじったり、顔をつくったりして、化粧品の実地宣伝をおこなっていた。

商品のケースや装飾壺などの置かれた長いカウンターをはさんで、デモンストレーションと「コンサルタント・美容の相談」コーナーなどが設けられており、そのいちばん端の角に、日灼けた屈強な男性が一人すわっていた。

彼の前にはもう一つ椅子があつて、OL風な若い女の子が、膝をつきあわせるような形で対があつて腰掛けていた。

男は、その女の子の指を手にとって、なにか指先の美容術でもほどこしているような具合に見えた。

「マニキュアかな」と流子は思ったが、男が、細密機械をいじったり宝石の鑑定の際などによくかける片眼の拡大鏡を眼にはさんで、女の指先を覗きこんでいる様子が、風変わりで、近寄ってみた。

——爪の化粧、マニキュア、ペディキュアに、思いきった、大胆なフィーリングの世界を開拓

してはみませんか。

という惹句がパネル・ボードに書きこまれていて、十枚ばかり、指先だけを拡大したサンプル写真が、その下に展示してあった。

それらのカラー写真は、一瞬、華麗な爪の刺青を、思わせた。

五本の指先がそれぞれクローズアップされた画面に、動物、花、人物像、紋章模様……など、さまざまな細密画が、じつにファッショナブルな絢爛たる図柄で爪の面を飾っていた。

極彩色のものもあれば、赤や黒、ブルー、黄金色などの色エナメル（けんめい）の爪肌に、白い線画で図柄を浮きあがらせたものもある。色を使わず、生地（けい）の爪肌を透かして下の血の気がほのかなピンク色に匂いたち、曙色（あけぼのいろ）の海か空に描きだされた幻の絵像を見るような爪もあった。

ふしぎな、爪飾りなのであった。

——たとえば、あなたのシンボルマーク、星座を絵にしてみませんか。それは、あなたが生まれるながらにもった守護神を、身におびることになりません。

——たとえば、あなたの好きな花、また、あなたの好きな人が好む花。それを爪飾りにしてみませんか。きっと思いがけない、新鮮な世界が、あなたのファッションに一つ、誕生する筈です。

などという文字が、その傍に並んでいた。

爪に絵を書く。ちよっとおもしろい着想じゃないの、と、流子は興味をそられて、拡大鏡の眼にはさんで、通りすがりの客らしい若いOL風な女の子の指にその装飾絵を描き入れている男の手もとを、覗きこんだ。

しかし、絵、と思ったのは、まちがいだった。

筆を使って描く細密絵と思って見た男の手には、細い錐状の柄のついた道具が一本にぎられていて、鋭い鋼鉄針のようなきつ先で、彼は女の爪の肌に綿密な彫刻をほどこしていたのである。

線彫りと言うべきか。

絵を彫りこんでいたのであった。

このときに、岸田流子は、あらためて、男の顔に視線をあてたのであった。

（おや）

と、彼女は最初思った。

なにか遠い記憶のかなたで花やかな気流がふと湧きたってながれたような、妙になまめいた情感が、胸の内を撫でてとおった。小さな不意の感動だった。

男は、しなやかな巻き毛に縁どられた強壮な襟首を繞め、前かがみに女の指先へ拡大鏡の眼を近寄せたまま、よどみなく造作もない手さばきで、彫刻針を動かしていた。

ときどき、白い彫り屑の粉を小さな刷毛で払いおとし、ふたたび丹念な細密作業にとりかかった。じつに熱心に打ちこんでいるようにも見え、機械的に苦もなく手先を動かしている風にも、

それは見えた。

肉眼では、針は一つ所にとどまって、やたらその部分をつつきまわしているのしか思えない動き方をしたが、傍のパネル写真に撮られている線彫り像は、たとえば空駆ける獅子座のライオン像にしても、風をはらんだたてがみの微細な一すじ、一揺らぎの先まで、精緻に掘り起こされて捉えられていた。

女は、左手の小指の爪を、その精悍な浅黒い男の手にゆだねていて、どうやら薔薇の花でもあらしく、小さな桜色をした爪の面には、あらかた花柄は彫りあげられていた。

へ八月×日から×日まで、当会場において無料サービス。以後は、銀座S堂本店、ショー・ルームにて、毎日午前十時より正午まで、午後二時より五時まで、彫画いたします。料金、一指、五百円。ご来店、ご利用下さい。

というような意味の宣伝板が、横に出ていた。

彫画という言葉が使ってたが、びったりな感じがした。

案外、若い連中がとびつくのではないかと、流子は思った。

パネル・ボードのカラー写真にも、いろんなケースが展示してあったが、絵具や色エナメルをとりいれた線彫りの生かし方によっては、もっと多彩な装飾効果が生まれそうな気がする、鮮やかな視点をもつ化粧術に思われた。

それに、どこか芸術的な香りや、五体に刻みこむ、という精神性の匂いたつところが、イカシた着眼点だ、とも思った。

女性ばかりではなく、あるいは男の子達にも受けそうな、ヤング・ファッションの先どりを感じさせた。

とにかく、美しい、華麗な感覚にあふれた爪飾りなのであった。

「色、入れる？」

と、そのとき、男の低い柔らかな声がした。

女の子に話しかけているのだった。

「いいえ。このままでいいわ。あんまりめだっちゃうと、恥ずかしいもの」

「うん」

と、男はうなずいて、

「その方がいいかもしれないな、君には。ちょっと見には、爪の傷に見えるだろ。けどよく見ると、薔薇の花だった、なんていうのも、いいじゃない」

「ええ」

女の子は、びよこつと肩をすくめて、はにかんだ。だがきわめて満足そうな表情をうかべて、にこつとした。

「さあ、いいよ」

と、男は、仕あげのブラッシングをすませて、言った。気軽な、さばさばした口調だった。

「これね、もつとめだたないようにしたいときにはね、ピンクのマニキュア液、べたに塗ってごらん。まったくわからなくなっちゃうから。光線のかげんでね、薔薇の輪郭が、ときどきふつと

浮きたつんだな、爪の底の方で。そんなのも、たのしいよ」

「はい。そうします。どうもありがとう」

女の子は、屈託のない声で、女学生みたいなおじぎをして椅子をたった。

一段落したという風に、まわりで見物していた客達は、メイクアップの実演の方へながれて行った。

流子は、ちらっと時計を見た。

まだ、二時間ばかりある。

彼女は、ゆっくりと男の前の椅子へ歩み寄った。

「お願いしてよろしいかしら」

「どうぞ」

男は、まっすぐに眼をあげてみつめるような流子の視線を、こともなげにはずし、手で椅子を示してすすめた。

「五百円なんて、安すぎやしません？」

「そうですか。そりやどうも」

「もっとも、S堂さんからは、高いギャラが出てるんでしょうけど……それにしても、安すぎるわ。こんな素晴らしい作品に」

男は、事務的に眼で笑って、

「ロハですよ、只今は」

と、言った。

「いいえ。わたしは、ちゃんとお代をお払いしたいわ。こんな芸術作品、ただどりにはできませんもの」

「まあ、掛けてください」

男は、べつにおどろきもせず、ごく無造作に、「さて」と言った。

「なにを彫りますか」

「注文してもよろしいんですの？」

「どうぞ。なんなりと」

「あの……」と、流子は、またまっすぐに男の眼のなかを覗きこむみたいにして、彼を見た。

「人物像にしていたけますか？」

「いいですよ。で、どんな？」

流子は、いきなり、そう言った。

「愛の姿みたいなのが、できましたら」

「愛？」

男は、流子を見返した。

「おもしろいですね。男？ 女？」

「両方」

と、流子は、悪戯っぽく、わざと声をひそめるようにして答えた。

「愛し合ってる二人がいいわ。それも、行動的なのが」

「というところ……キスかなにかしてる？」

「そうね……もったこう、愛を確かめ合ってるって感じの」

男は寸時、まなじりを細めるようにして、流子を見た。眼の奥に、笑いをふくんだ、「了解」という納得の色が生まれた。

けれども彼は、しごく平然とした声で、

「つまり、アレ？」

と、聞き返した。

「ええ」

「ヌードの？」

「ええ。もしお願いできたら」

「できますよ、なんでも。お望み次第。ポルノだね？」

「いいえ。あなたの腕前なら、立派な芸術作品になるわ」

「芸術ねえ。アレ、芸術かねえ」

男は、錐きりのような道具をとりあげて、先の尖りとがを試しでもするように、軽く自分の指の腹へおしつけた。

「しかし、いいのかな。そんなもの、爪に彫っちゃって」

「エナメルで隠れるんでしょ？」

「そりゃまあ、隠そうと思えばね」

それから、「さて、でははじめますか」と、流子の顔をぶつきら棒に正面から見あげた。

「あの、どのくらい時間かかりますの？」

「そうだな……三十分……ま、もうちょっとかかるかな。あんまりあつけなく、アッという間に終るのも、愛し合っちゃってる二人に気の毒でしょ」

「ま」

と、流子は、睨むような眼になって、口尻を同時にはころばせた。その顔は、充分になまめかしく、自分でもかなり気に入っているのである。彼女は、自分の顔のどの部分をどういう風に動かせばどんな表情になるかということ、かなり詳しく熟知している。

この爪飾りを彫る男の正体に気づいた瞬間から、流子は、知らぬ間に大胆な媚態と蠱惑的な言動を駆使用する女になっていた。

「でも、大丈夫かしら。ここで、こんなことお願いしちゃって」

と、流子は催し場の客達をそれとなく気にして、振り返ってみせたりした。

「平気ですよ。なんなら、少しばかり椅子を移動させましょう。そう。こうしとけば、覗きこまれても、絵柄までは見えやしない」

男は、流子の椅子を壁ぎわに移して、

「さて、では、どの指にしましょうか」

と、がっしりとした、それは流子には十分に煽情的な褐色の筋肉質な手を、流子の前へさしの